

# 古典の日

十九  
越後



松尾芭蕉

酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたまして、加賀の府まで百三十里と聞。鼠の関をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中の国一ぶりの関に至る。此間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

## 奥の細道

文月や  
六日も常の夜にハ似ず

荒海や  
佐渡によこたふ天河



芭蕉もこうした光景を見つめたことだろう。新潟市内の海辺から日本海を望む(新潟観光コンベンション協会提供)

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集2『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

芳賀徹さんとたずねる  
おくのほそ道

## 銀河の鎮魂曲

六月十八日(陽曆八月三日)、好天の下、芭蕉と曾良は象潟から酒田に帰った。宿は再び医者で俳人の伊東不玉宅。七日間ゆくりとして、不玉との三時で連句一歌仙を巻いたり、豪商の家に招かれて眞桑瓜を題に即興を奏しんだりもした。二十五日(八月十日)酒田出立のときには、不玉父子八人ほどの俳句好きが町はずれまで来てくれて、別れを惜しんだ。芭蕉が「酒田の余波日を重て、北陸道の雲に望。遙々のおもひ胸をいたしまして」と書くのは、このたびの象潟めぐりと酒田逗留が「おくのほそ道」の旅のいわば折返し点であらう加賀の金沢まで百三十里、親しい俳友もあまりない長い帰路の淋しさを思いやつてのことだった。そのためか、越後路の記述は、酒田から市振まで実際は十五日もかかったところをわずか三、四行に省略し、村上や新潟、直江津、高田のことにも触れずに急いでいる。そのかわりとも言うべきか、直江津での作「文月や」の句は、明日が七夕という夜の恋心のとくめきを言いつつも、その裏に北陸道の旅の孤愁を伝えていた。そして同じく七夕を寓意して「天河」を季語とする出雲崎での句――  
荒海や佐渡によこたふ天河

これこそ山寺や月山、最上川の句と並んで芭蕉紀行中の最高の作に違いない。秋七月となって荒れはじめた日本海の夜の暗い波濤のなかに、見えるともなく浮かぶ佐渡ヶ島、それは順徳院、日野實朝、日蓮、世阿弥をはじめ多くの人が配流された悲劇の島。その往年の流人たちの切ない望郷の思いをこぼるの岸につきなご、また鎮魂するかのよう、いま天河が荒海の上に大きく白々と横たわる。こゝでも「横たふ」を自動詞とした用法が強調でみこころである。後年、芭蕉がこの句につけた「銀河ノ序」―「日既に海に沈て月ほのくらく、銀河半天にかりて星きらりと牙たほの沖のかたより波の音しはくはこびて」―は、かつて永井荷風が十九世紀フランスのどんな作にもあつぬ散文詩の名品と讃えた文章だった。

## 特殊相対性理論の思い出

古典と聞いてまず思い浮かべるのは、「今何と書いて」と聞く「時と空」である。このような



国際高等研究所所長 尾池和夫 さん

自然科学でも、古典とつく分野がある。古典物理学とか古典力学、古典遺伝学などである。京都大学理学部に入つて、教養課程の教科書の中にゴールドスタインの『古典力学』が登壇した。この『古典力学』が、特殊相対性理論が登壇した。この厚い教科書が、今わたしたちは高校時代のクラスメイトと暮らしているが、学生時代の彼女に、特殊相対論の運動方程式を紙に書きながら説明したことがあった。彼女も納得しながら聞いていた記憶があるのだが、若い頭脳の理解力が強かったのか、今では不思議と思う記憶の場面ひとつである。



京都三大門の一つと言われる仁和寺の二王門(京都市右京区)

い酒宴の席で、調子に乗った僧が足鼎を頭にかぶって踊った後、鼎が抜けなくなって大騒動になった話。あまり興に乗じて軽率な行動をとると、とんでもない事になると諭しています。鎌倉時代末から約700年の時を経て人々の営みやそれに対する思いは変わらず、そのことに今を生きる者として何故か安堵感を感じます。その思いを胸に、仁和寺から「きぬかけの道」を歩くもよし、妙心寺、等持院を経て仁和寺に辿り着くのもまた一興かと…。(NPO法人・都草 西野 嘉一)

## 仁和寺の僧の明るい失敗談

## 文学ウォーク

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

## 親しむ